

iRIC10周年記念シンポジウム さらなる活用方法探る

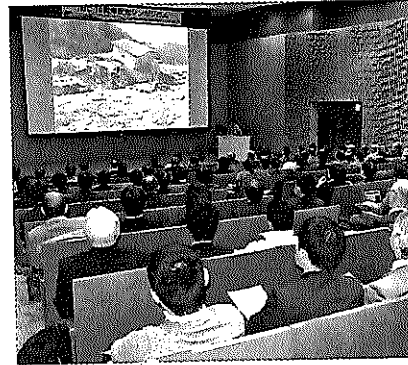
成果や課題踏まえ議論

iRIC研究会の主催で、道河川財団共催の「水書解析用フリーソフトiRIC十周年記念シンポジウム」が十六日、北大フロンティア応用科学研究棟で開催された。関係者約二百二十人が参加。講演やパネルディスカッションを通し、水書解析用フリーソフト「iRIC」の活用方法や今後の発展などについて理解を深めていた。

日米共同で開発されたiRICは、河川の流れや氾濫・浸食等の解析に用いられている無料のソフトウェア。開発開始十周年を記念して行う今回のシンポジウムでは、iRICのこれまでの成果や課題を踏まえ、さらなる活用について議論する予定がある。

はじめに、道河川財団の岡部和憲理事長があいさつ。iRICが全世界で成果を上げてきたことを紹介した上で、「もっと多くの人が参画するよう、進化していく」と強調。今後のさらなる発展を期待を寄せた。

続いて、北大工学研究院の清水康行教授が「iRICの軌跡」と題して、構想



米国内務省地質研究所の

専門官は「札幌川自然再生事業に伴う河道変化予測」について説明。建設部維持管理防災課の岡垣久主幹は「北海道の中小河川におけ

220人が参加のもと、講演等が行われた

るiRICの活用」について紹介するなど、iRICの活用方法について情報を共有した。このあと、最新版iRICのソフトウェアに関する説明に続き、パネルディスカッションを実施。清水教

授や開発局河川計画課の時岡真治河川調整推進官、ドーン技術情報部の向井直樹部長ら五人がパネリストとなり、「iRICの未来」をテーマに意見を交わした。